

# お店をPR！ 今日からあなたが子ども販売員！

授業者 安倍 堅介

## 1 本実践の教材について

本単元では、地域に見られる販売の仕事について消費者の願い、販売の仕方、他地域や外国との関わりなどに着目して、販売に携わっている人々の仕事の様子を捉え、それらの仕事に見られる工夫を考え表現する活動を通して、販売の仕事は消費者の多様な願いを踏まえ売り上げを高めるよう工夫して行われていることを理解することをねらいとしている。

本単元では販売の仕事を学ぶためにスーパーマーケット（以下、スーパー）を例に取り上げ、学習を進める。子どもたちにとってスーパーは身近な存在であり、買い物をした経験もあるだろう。お菓子や新鮮なお肉や野菜、生活必需品などが手に入る身近な場所であるという認識をもっている。しかし、販売の仕事に携わる人々が消費者の願いや思いを大切に、それらとつながるように仕事の工夫を行っていることにまでは目が向いていないと考えられる。また、スーパーなど一つの社会的事象を例に学習を進めることで、子どもたちがスーパーの「仕事の工夫」を学ぶことに終始してしまうという実践も少なくない。

そこで本実践では、子どもたちがスーパーを例に学習を進めたのちにコンビニエンスストア（以下、コンビニ）を取り上げる。スーパーの「仕事の工夫」を学ぶ際に働かせた見方・考え方を生かしてコンビニの「仕事の工夫」にせまれるようにする。2つの社会的事象の比較を通して、子どもたちは販売の仕事について概念的に捉えていくだろうと考える。

単元の導入では、家庭と連携をして買い物調査を行い、消費者の視点で自分や家族がどんな願いをもって買い物をしているかに目を向ける。また、スーパー内の配置図を考えることで、普段何気なく行っているお店の様子に目が向いていないことに気付かせる。価格、品揃え、鮮度、利便性といった視点でスーパーの「仕事の工夫」を見学することを通して、子どもたちは販売の仕事が様々な工夫のもとに行われていることに気付くだろう。また、店長さんの「販売の仕事の工夫をさらに多くの消費者の方々に知ってほしい」という思いに触れることで、それを周囲の人に伝えたいという思いをもつだろう。そのような思いが高まったのちに「子ども販売員となってお店をPRするチラシを作ろう」という構想活動を子どもたちと設定する。販売員という立場を意識させることで、消費者であるお客さんに相手意識を向けて「仕事の工夫」を捉えられるようにしていく。また、1番身近な消費者である家族に向けてチラシを作成することで、販売者、消費者という立場を大切に販売の「仕事の工夫」を多角的な視点で主張できる記事になるだろうと考える。

特に本時では、スーパーとコンビニの仕事の工夫を比較し考えることを通して、販売の仕事について概念的に捉えられるようにする。販売の「仕事の工夫」は様々に行っているが、消費者のことを考え行われていることに気付いた子どもたちは、学びをキッチンカーなど他の販売の仕事に広げていくことができるだろう。

単元終末には、立場を再び消費者に戻すことで、販売の仕事での学びを自らや家族の消費生活に生かせるようにする。販売に携わる人々の思いを理解し表現することを通して、販売の仕事は利益追求のみではなく消費者の願いをもとに行われていることに気付き、身近な社会的事象を自分事として多角的に捉え、学びを生活につなげられる子どもを育てていきたい。



【チラシの枠組み】

## 2 単元の構想

本実践では、次の2点をポイントに単元を構想する。

- 単元の中でスーパーマーケットとコンビニエンスストアの「仕事の工夫」の学習を行うことで、2つの社会的事象を比較して販売の仕事についての概念化を図れるようにする。
- 販売員として「販売の仕事の工夫」の記事を書くなど、立場を意識させた構想活動を行うことで、人々の営みの背景にある情意面と関連させて社会的事象を捉えられるようにする。

## 3 研究の視点に沿った具体的取り組み

### (1) 自分事として社会的事象の追究に向かうための単元構成の工夫

単元の導入では、消費者として自分や家族の買い物の経験を出し合う。全体で出し合うことで、消費者が様々な思いをもって消費生活を営んでいることに気付くであろう。次にスーパーの店内配置図をかく活動を通して、普段何気なく行っている商店であっても、細かい部分にまで目が向いていないことに気付かせる。実際にスーパーでの現地調査を通して、スーパーで働く人は様々な「仕事の工夫」をしていたことに気付くだろう。店長さんから「販売の仕事の工夫をさらに多くの消費者の方に知ってほしい。」という切実な思いを聞くことで、子どもたちと【子ども販売員となってお店をPRするチラシを作ろう】という構想活動を設定する。伝える相手を子どもたちにとって1番身近な消費者である家族に設定することで、単元の学習を踏まえて自らや家族の消費生活に生かすという目的意識をもって取り組めるようにする。

### (2) 対話を通して社会的事象を多面的・多角的に捉えるための手立て

「消費者の願い」と「仕事の工夫」を焦点化して関連付けて考えられるようにするために、子どもたちが作成してきたチラシの記事を取り上げ、比較する活動を行う。例えば、『お肉や魚に消費期限が書いてあるのは、より新鮮な物を買いたいという人のためだ。』というように、子どもたちによりよい販売員さんとは？という視点でよいチラシになる評価基準を考えさせる。消費者に向けてのチラシであるため、販売員としてお店の売り上げを重視するべきという立場から「仕事の工夫」だけを掲載するだけでは不十分であることに気付いていくだろう。

また、単元の中でスーパーとコンビニを取り上げ、学習を進める。子どもたちはスーパーで学んだ視点を生かし、コンビニの「仕事の工夫」について捉えていくだろう。スーパーとコンビニの「仕事の工夫」について、立場を考えながら比較することで販売の仕事は売り上げを高めることだけでなく、消費者の願いや思いを大切にしているという概念的な知識の獲得、また、他の事例にも転用できることに付き、授業外での学びにつなげられるようにする。

### (3) 学習の過程を振り返り、社会とのかかわり方の更新を促すための工夫

子どもたちが問題解決の過程で働かせた見方や考え方を自在に働かせるようにするために、自らの学びをメタ的に振り返る場面を設定する。構想活動に生かされた資料や友達の発言、自分の考えの変容やそのきっかけ、次時への見通しの視点で記述をさせ、学びを深められるようにする。本単元では学習支援ソフトを活用し振り返りを1枚のシートに書き溜めていくことで、単元を通しての自己の学びの変容を自覚できるようにする。教師が振り返りを授業内で取り上げ、価値づけることで子どもたちが社会的事象にかかわる際の視点を増やしたり、更新したりできるようにする。

単元終末には販売者から消費者へ立場を変えて振り返りをさせることで、子どもたちが社会科での学びを実生活に生かし、社会とかかわり続けようとする意識を高められるようにする。また、本単元での学びを評価問題として作成させることで、学習前は無自覚であった本単元で働かせた見方・考え方を自覚化させ、学びや学び方の更新ができるようにする。